

次の企業と FIVE STAR MAGAZINE は士業界を応援しています。

Powered By
ご協賛企業



ストライク

NOTHING IS
impossible

特集

What's

事業承継

～将来、あなたの事務所を
どうするか？

オオノオ!!

連載

“I can't believe
ChatGPT
can do this!”

こんなことまで できるなんて!

取材／セブンセンス税理士法人（東京都港区）
ディレクター 公認会計士・税理士 大野修平氏

第6回 取材日

2025.8.13

このまま ChatGPT が進化すれば、士業を始めとするホワイトカラーの仕事は奪われていく——!?
そのことに危機を感じた我々は、“税理士業界における ChatGPT の第一人者”大野修平氏とともに、ChatGPT の進化の動向をウォッチしていくことにした。ChatGPT の進化は止まらない。それどころか早まるばかりだ——

オオノオ!! なんてこった!!

(文・武田司、GPT o1 pro)

GPT-5 が登場!

—「ChatGPT-5」がリリースされました。

大野：出ましたね。ついに登場です。

—新モデルのリリース時期は、あらかじめ予想されていたのですか？

大野：この夏頃にリリースされるだろうと、多くの人が予想していたと思います。ただ、サイクルが早いんですよね。o3 のリリースが4月で、その後すぐに o4-mini が出て、そこから間を置かずに今回の GPT-5 ですからね。

—大型アップデートとしては、GPT-4o 以来になりますね。

大野：はい。メインモデルの更新としては

2024 年 5 月以来になります。

—リリースされて間もないですが、率直なご感想を聞かせてください。

大野: SNS 上では、「GPT-4o を返してほしい」という声が多く見られます。

—それは、どういう理由でしょうか？

大野: GPT-4o は親しみやすいモデルで、ちょうど良い性能だったと感じる人が多かったのだと思います。

しかも現在は「GPT-5」シリーズのモデルしか使えなくなっています。スマホアプリ上ではまだ、レガシーモデルも選択できるのですが、パソコン上では GPT-5 シリーズしか使えません。

—なるほど、だから「GPT-4o を返してほしい」という声が出ているのですね。大野先生自身は、GPT-5 をどのように感じていますか？

大野: 私も、GPT-4o は非常に使いやすいモデルだったと思います。でも、私は GPT-4o よりも o3 をよく使っていました。

しかしその o3 も、現在は利用できなくなっています。現在、選べるのは「GPT-5」「GPT-5 Thinking」「GPT-5 Pro」の 3 種類です【写真】。このうち Thinking が推論モデルで、o3 の後継に当たると考えられます。

—大野先生が o3 をメインで使っていたのは、なぜですか？

大野: 推論モデルなので、深く考えてから実行してくれることが多いからです。日常会話なら GPT-4o で十分でした。GPT-4o はレスポンスが速く、テンポの良い会話ができるのが特徴でした。

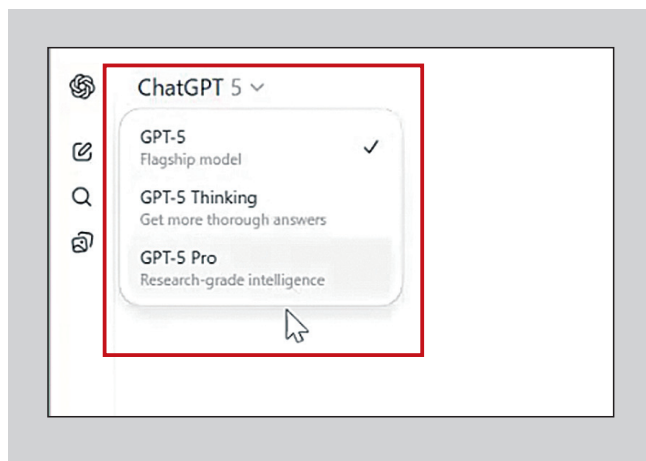
しかし私は仕事で使うことが多いのでスピードはそれほど重要ではなく、じっくり処理してほしいため o3 を使用していました。

—なるほど。それでは今は GPT-5 Thinking をメインに使っているのですか？

大野: そう言いたいところですが、違います。モデルの選択はこれまで通り左上のプルダウンメニューからできますが、GPT-5 になってからは基本的に GPT-5 にセットしておけば、ChatGPT が自動で即答モデルと推論モデルを切り替えるようになっています。これは、これまでになかった大きな変更点です。—即答モデルと推論モデルを、自動で使い分けてくれるのですね。

大野: はい。両モデルが統合されているので、あとはプロンプトを入力すれば ChatGPT がどちらのモデルが適しているかを判断して実行します。

確実に推論モデルを使いたいときは「推論



モデルを使って」とか「よく考えて」「Think hard」などと言え切り替えて実行します。反対に答えを早く欲しい場合は、そのように指示をすればいいだけです。

また、推論モデルで ChatGPT が考えているときには「Get a Quick Answer」というボタンが表示されていて、待てない場合はそれを押せば GPT-5 が即応します【次ページ写真上】。

—使い勝手が良くなりましたね。

大野: これを便利に感じる人もいれば、そうでない人もいます。

また、実行後に「Try Again」ボタンを押すと、使用したモデルが表示されます。そこで例えば「Used GPT-5」と表示されれば、GPT-5 を使ったということです。結果が思わしくなければ、「Switch model」からモデルを選び直すことで、そのモデルを使って実行し直します【次ページ写真下】。

—私は GPT-5 をまだ 2 日ほどしか使っていませんが、これまでより指示をきちんと守り、期待に近い結果を返してくれるようになった印象を持っています。

大野: 精度はとても良くなりましたね。

—回答が出るスピードも速くなったように思います。

大野: GPT-5 は速いですね。ただ、GPT-5 Thinking はかなり遅く、Pro モデルは非常に遅いです。o3 Pro もそうでしたが、とにかく遅い。ですから、プロンプトを投げておいて、別作業をするのが Pro モデルの使い方になるでしょう。休憩していても良いですが、画面をずっと見ていると待ちくたびれてしまいますね（苦笑）。

仕事で「実用」できるということは、「代替可能」になったということ

大野: GPT-5 になって、アウトプットを見て



もレベルが高くなっていますね。すくなくとも人間のレベルはすでに超えていると思います。

例えば「Thought for…」をクリックすると、モデルが何を考えたのか、思考履歴が表示されます【次ページ写真上】。この内容からも、思考レベルの高さや視点の秀逸さがうかがえます。

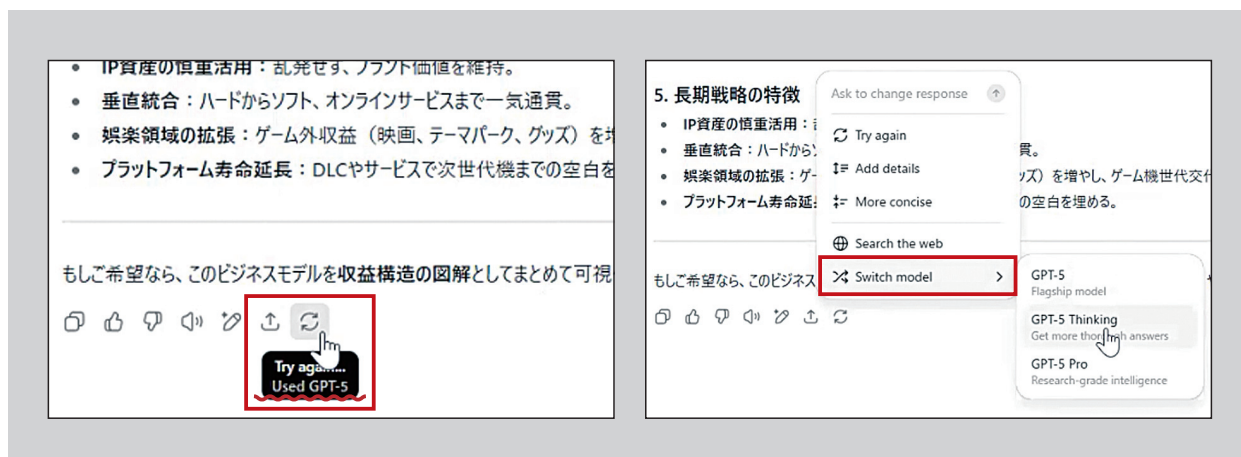
アウトプットにも、全ての情報源が付いています【次ページ写真下】。

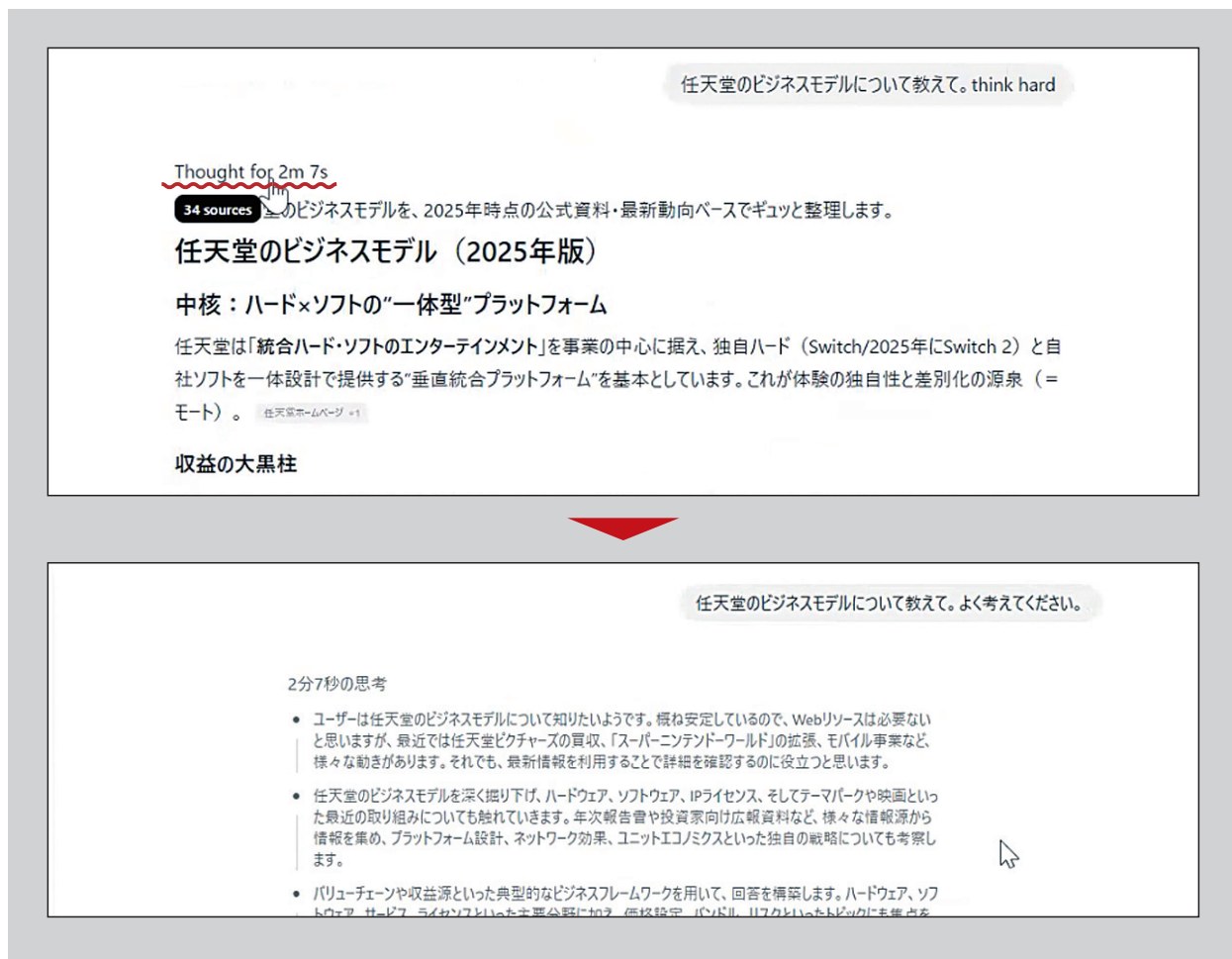
—これはもう敵いませんね（苦笑）。

大野：AIに抗うのを諦めるときが来たのかもしれない。

—新聞記事を読むと、「今回の GPT-5 の進化は期待以上ではない」という評価が多いのですが、私はそうは思いませんでした。ようやく「実用」と言えるツールになったと感じています。

大野：それは使い方によって印象が変わると思います。GPT-4o に恋愛相談をした青少年も多かったと思いますし（笑）、普段使いな





ら GPT-4o で十分だったと思います。

ただ、GPT-5 はそうした用途にはあまり向いていない気がします。

ービジネス面から見れば評価すべき進化ですが、多くの人が期待する「AI の進化」とは少し違うということですか？

大野：進化は間違いなくあります。それはオープン AI 社が数値で示しており、明らかに向上しています。

ただ、その進化を人間が感じ取りにくくなっているのだと思います。例えば、東京大

学や京都大学やハーバード大学の学生と話しても、みんな賢そうに見えて、誰が一番賢いかは分からないですね。ただ、ハーバードの人は会話も楽しくてなんとなく好印象だった…。そうした感覚に近いと思います。

もはや一般の人が、どちらが優れているかを判断できるレベルではなくなってきている気がします。

ーいずれにせよ、より仕事に使えるようになったので助かっています。

大野：助かったなんて言ってる場合ではないですよ！ 恐ろしいと言うべきです。

ーああ、確かにそうですね。ただ、私は目の前の原稿を作るのに「助かるな」という視点でそう言いましたが、本来は「恐ろしい」ことですよ。

“愚かな人間”に考えさせるな

ーGPT-5 が出たばかりなのでこし気が早いのですが、今後の進化はどのような形で進んでいくのでしょうか？

大野：いくつかあると思いますが、一つはコンテキストの理解力が高まっていくと思います。これから、AI が扱えるトークン数が増



加していきます。例えば Gemini で言えば、現在扱えるトークン数は 100 万トークンと言われ、書籍に換算すると 10 冊弱を一度に読み込める計算になっています。今後は、扱えるトークン数が飛躍的に増加していくと考えられます。

もう一つはハルシネーションの問題です。現状でもほとんどありませんが、この誤情報がさらに減って、ほぼ間違いのない出力ができるようになるはずです。

さらに、ファインチューニングもより容易になるでしょう。ユーザーのことを深く理解して、回答や挙動などもユーザーごとに最適化されていくはずです。

そして現在 Gemini などが進んでいるように、他のアプリケーションとの連携も進んでいくでしょう。現在は Gemini が Google ドライブや Gmail を扱えるようになっていますが、今後は ChatGPT でもアプリケーションを直接操作することが可能になると思います。

ほかに VR グラスや XR グラスと連携するようになれば、私たちは ChatGPT の情報と現実の世界を同時に見られるようになります。例えば今こうしてインタビューを受けている私は、実は ChatGPT が作った回答を読んでいるだけになるかもしれません（笑）。つまり人間は、アウトプットするためだけの存在になるのです。

—アウトプットするだけ、ですか…。

大野：はい、強くそう思います。インプットとアウトプット——「アウトプット」という表現は少し語弊があるかもしれませんが——要するに、その間にある「考えること」は人間がしなくなると思います。

むしろ、これからは考えてはいけません。なぜなら、GPT-5 はまだ正式な数値が公表されていませんが、o3 の IQ は 132 で、GPT-5 はそれをはるかに上回ると Open AI 社はアナウンスしています。そんな存在がいるのに、わざわざ人間が考える理由はないでしょう。

—愚かな人間が考えてはいけない、ということですね。

大野：ですから、残されるのは身体性を伴う作業や労働、それから選択です。AI は分析が得意で、そこから複数の選択肢を提示します。その中からどれを選ぶか、最終的な判断は人間が行うべきだと思います。

—選択も、賢い AI に任せようがよいのではないですか？

大野：いいえ、それは違います。なぜなら、選択に基づいたアクションを実行するのは人だからです。人間は自分で選んだものでなけ

れば、やる気が出ません。最終的に選び、それを実行していくのは人間です。

—なるほど。ビジネスでは選択肢がいくつあっても正解が一つとは限らず、判断も必ずしも理屈だけで決まるわけではないですからね。

大野：私は、生成 AI は成功確率を上げるためのツールではなく、失敗確率を下げるためのツールだと思っています。

例えば AI が提案した複数の戦略があったとすれば、そのどれを選んでも一定の成功確率があり、大きな失敗は避けられるでしょう。しかし、選んだものを「正解」にしておくことは人間にしかできません。複数の人が同じ戦略を選んでも、成功確率は異なります。

それは「誰がやるか」が重要だからです。戦略が優れていたり、優秀なスキルを持っている人がいたりしても、最終的に飲み会での立ち振る舞いが上手な人や、かわいげやマメさのある人が成功する場合があります。そこは、生成 AI の手の及ばないところです。

書を捨てよ、町へ出よう

大野：繰り返しになりますが、大切なことは「私たちが成功させることができるものはどれか」を考えることです。

第一条件は、まずやりたいかどうか。やりたくないことで成功することはできません。さらに、その戦略が自分たちの会社や組織の文化や目的に合っているかどうか。そして、リソースが十分にあるかなど、多くの要因があります。

結局のところ、何を選ぶか以上に、選んだものを正解にできるかが重要なのだと思います。

—なるほど。

大野：これはキャリア形成にも当てはまります。多くの方は自分のキャリアパスについて「何が正しいのか」「どうすれば良いのか」と悩みますが、結局は目の前の仕事に全力で取り組むことが正解に繋がっていくはずなんです。それなのに多くの人が、「正しい答え」を探しすぎています。

でも、今はそこを手放せるようになってきました。AI に「成功するためのキャリア戦略を 3 つ出してください」と聞いて、その中からやりたいものを選び、それを正解にしていくのが良いのだと思います。

—選んだものにコミットできるかどうかの問題だということですね。

大野：そうですね。私は以前から「正解はもともと存在するのではなく、自分で正解にしていく作業なのだ」と考えてきましたが、生成AIがこれだけ発達すると、本当にその通りだなあと感じます。

—どれも正解なのかもしれません。ですから、これからキャリアを築く人は大変ですね。

大野：それはどうでしょうかね。AIネイティブの学生たちは、私たちよりも割り切ってAIを活用しています。

来年からはGPT-5を一年間使い倒してきた世代が社会に入ってきます。彼らは私たちを見て、「なぜ、この人たちはこんなに一生懸命になって考えているのだろう？」と不思議に思うことでしょう。「考える」という作業を過剰にやっていると感じるはずですよ。

彼らにとっては、考えるのはAIに任せるのが当たり前のことですが、会社の上司は延々と会議を重ね、あれやこれやと悩み続けている。だから、会社が前に進まないのだと彼らに笑われるかもしれません（苦笑）。

—新人研修などにおいても、時代錯誤感が大きく生まれてしまう可能性がありますね。

大野：そうですね。だから、研修内容も変えなければいけません。「思考力」や「論理力」を養う研修は、もはや不要になります。それらは人間が担う領域ではありません。

それよりも、AIが考えたことをどう実行するのか。人を巻き込む力や、かわいがられる振る舞いをどう身につけるのかを研修すべきでしょう。

—そう考えると、まだまだ学ぶべきことはたくさんありますね。

大野：そうです。うちでも税務研修や会計研修は当然続けていますが、それに追加して

コーチングやコミュニケーション研修をもっと増やしていこうという話になっています。—なるほど。ますます、コミュニケーションに強い人材が求められるようになるわけですね。

大野：そこが弱いのが士業なのですがね（苦笑）。

いずれにせよ現実として、3年ほど前から生成AIが登場し、そろそろ私たちは認めなければなりません。すこしずつ受け入れてきたと思いますが、今認めるべきことは「考えることを手放しましょう」ということです。—ついに、そうしたフェーズに入ったのかもしれませんね。

大野：私は以前から生成AIは使えると言っていました。原稿の作成には「まだ使いづらい」とおっしゃっていましたが、しかし、いよいよGPT-5が出て「これは使える」と話しました。そろそろ観念したほうがよいのではないのでしょうか？（笑）

—確かにそうですね（苦笑）。では観念して、今回のインタビューの原稿は全てGPT-5に任せて作成しますので、そのアウトプットの確認は大野先生にお願いしてもいいでしょうか？（笑）

大野：それでも構わないと思いますよ。そういう時代になってきている気がします。

そうやって人間が何かを考えたり生み出したりする時代は終わり、これからは「何を選択し、何を正解にしていくのか」という時代になっていくのだと感じます。

そのために必要なのは知識ではなく、振る舞いや雰囲気、経験、視点といった、より総合的な力だと思います。

—「書を捨てよ、町に出よう」ということですね。

大野：本当にそうですね。でも、AIを活用すれば、「書」も「町」も、両方を得られるようになるというのはすごいことですよ。■

セブセンス税理士法人

(東京都港区)

公認会計士・税理士、ディレクター

大野修平

大学卒業後、有限責任監査法人トーマツへ入所。金融インダストリーグループにて、主に銀行、証券、保険会社の監査に従事。トーマツ退所後は、資金調達支援、資本政策策定支援、補助金申請支援などで多数の支援経験を持つ。また、スタートアップ企業の育成・支援にも力を入れており、各種アクセラレーションプログラムでのメンタリングや講義、ピッチイベントでの審査員や協賛などにも精力的に関わっている。

